声教・後藤の

3度のメシより入試問題

後藤和浩

ごとう かずひろ（49歳）

株式会社声の教育社代表取締役社長。大学卒業後、塾講師などを経て、「やはり自分は入試問題を解くことが大好きだったから」という理由で声の教育社に入社。以来、一貫して編集部で過去問題集の編集・制作に取り組む。2020年、同社常務取締役に着任。同社の三谷潤一氏とともに、YouTube「声教チャンネル」の語り手としても人気。2024年8月に社長に就任して現在に至る。

毎年、個性的で面白い出題が数多く見られる中学入試問題。過去問題集でおなじみの「声の教育社」社長の後藤和浩さんが、「この出題をした学校の先生にお話を聞いてみたい！」と思った私立中学校の先生にインタビュー取材！出題とその作問コンセプトなどをご紹介します。

（左から）鈴木 仁義先生　中村 陽一先生　横倉 浩一先生

第６回

［今回お話を伺った学校］

海城中学校

〈東京都新宿区。男子校〉

価値観が揺さぶられる一問を

── 国語出題者が語る作問の哲学

こんにちは！声教の後藤です。
今回は、名門男子校・海城中学校の国語の入試問題を紹介します。
読解題のための文章が選ばれ、
設問が組み立てられるまでにはどんな思いが込められているのか ──
入試問題の奥に貫かれた哲学や、
子どもたちに届けたい学びの本質について、
じっくりお話を伺ってきました。

「いい話」より、「本気で考えさせたい話」を

後藤　本日はお忙しいところありがとうございます。海城中学校の入試問題について、出題に携わられた中村先生（国語科主任）、横倉先生（国語科・図書館部部長）、鈴木先生（国語科副主任）にお話を伺います。

私は海城中学校の入試問題が大好きで、長年こちらの出題を追いかけてきました。作問された先生方に、こうして直接お話を伺える機会をいただき、感激しています。

では、まずは海城中学校の国語の出題方針やコンセプトについてお聞かせいただけますでしょうか。

中村　本校公式の出題方針についてはホームページで公開していますので、今回は作成者個人の思いといった部分を中心にお話しさせていただきます。

作問は、受験生にぜひ読んでもらいたいと思える文章を探すことから始まります。問題で引用できる部分は限られていますが、受験が終わった後にその前後を読みたいと思ってほしいですし、手元に残しておきたいと思えるような作品を選べたらと考えています。

後藤　出典選びには相当こだわっていらっしゃるんですね。

中村　受験生は入試問題を多く解いてきているので、「少年が一度は挫折するが、最後には前向きに頑張っていこうと決意する」のような入試国語によくあるパターンの問題に慣れすぎているように思うのです。現実には前向きになれないこともあるわけなので、そういう問題にばかり触れていると、「綺麗ごと」を押しつけられていると感じるようになるかもしれません。そういう問題はある一定の道徳観に沿って読んでいけば解けてしまうことに気がついて、言葉は悪いですが、小説を読んで問題を解く営みを「ダサい」と感じるようになるかもしれません。解答に迷ったときには「道徳的に正しいものを選べば良い」という指導があるとも聞きます。

海城中学校　近年の国語出典

2025 第1回	小説	革命前夜（小川哲）	2025 第2回	小説	あの空の色がほしい（蟹江杏）
	説明文	句点。に気をつけろ（尹雄大）		説明文	生き延びるために芸術は必要か（森村泰昌）
2024 第1回	小説	墨のゆらめき（三浦しをん）	2024 第2回	小説	タルトタタンの作り方（村上雅郁）
	説明文	熟達論（為末大）		説明文	「かわいい」のマジックはどこにある？（山口真実）
2023 第1回	小説	星の随に（窪美澄）	2023 第2回	小説	風の港（村山早紀）
	説明文	科学と文学について自分なりに考えてみた（川添愛）		説明文	だからフェイクにだまされる ── 進化心理学から読み解く（石川幹人）

だから、「ダサくない」問題を出したいです。「綺麗ごと」の枠を超えて、できれば受験生の価値観を揺さぶるような文章を扱いたいです。共感しやすい同世代の少年の物語である必要はないですし、極端な話、小学校で叱られるようなことを肯定する内容でも構わないと思うのです。

後藤　確かに、今回の問題を見ても、小学生にとってはあまり考えたことのない新しい価値観や感情が示されていると感じました。

中村　ただ、5､000字程度の引用範囲で深い理解を試す素材文を見つけるのは本当に大変なんですよ。

横倉　読ませたい本をまず見つけなきゃと、一年中考えながら過ごしています。

出典選びのこだわり

後藤　今年の入試問題に出された作品も、そうした苦労の中でお決めになったんですね。では、今回の作品を採用した理由などを教えていただけますか。

中村　第１回入試で出題した小川哲さんの「革命前夜」は、先生の指導によってみんなが互いをほめ合いながら仲良くするようになったクラスに疑問を持つ小学生の話です。中学入試ではあまり出題されないような物語かもしれませんね。

後藤　なるほど。受験してくる子たちは、いわゆる道徳的にちゃんとしている子が多いので、「これの何がいけないの？」と思う子もいるかもしれないですね。

> 「革命前夜（小川哲）」（「新潮」創刊120周年記念特大号掲載）。小学六年生のときの担任だった須磨が市議会議員になったと知った小説家の「僕」は、須磨が学級崩壊していたクラスを立て直したことや、ある制度をきっかけに自分が須磨に苦手意識を持ち始めたことなど、当時を振り返る。（声の教育社 過去問題集「解説」より）

横倉　社会的良識が備わっていたり周囲とうまくやれていたりする子ほど､深く考えずに自分の常識的な生活感覚だけで処理してしまうことがありますからね。

中村　主人公の「僕」は先生が作り出す「みんな幸せでいいじゃないか」という雰囲気に馴染めず、緩やかに排除されていきます。どこか全体主義的な怖さも感じさせる小説ですし、SNSで人々の分断を助長するような言説が跋扈する現代の風潮とも重なってくるように思います。ただ、最後まで「僕」が正しいと示されることもない。何が正しいか明確には示されません。たとえば、小学校の教員としていろいろな生徒がいるクラスをまとめるためには、そのような方法を取らざるを得ないのかもしれない。受験生はモヤモヤするかもしれませんが、その先は自分で考えてもらいたいのです。簡単に答えを出すのではなく、そのモヤモヤとした葛藤の中にあえて留まってほしいと思います。

後藤　先生、私、もうすでに圧倒されています…授業を受けている気分になってきました。

ほかに出典選びでポイントにしていることなどはありますか。

横倉　国語の素材文について、学校によっては「学校の教育方針に沿った作品を出す」というところもあるようですが、私は学校の方針は考えに入れていません。「この学校のフィロソフィーがこうだから、それに合った作品を」となると、テーマや正解の方向性があらかじめ決まってきてしまって本来の読解力が判定できなくなります。問題はあくまで「当日配られた文字の中だけから読み解いてほしい」のです。

中村　今、目の前にある本文を新鮮な気持ちで読むといった感じですね。

後藤　あらゆるものから切り離され、その場には「受験生と文章」しかないのですね。

鈴木　ただ、結果として現実の社会問題と重なることもあります。今回の小説のテーマである「価値観の相違」と「分断」は、昨今の世界情勢について考えるキーワードになり得るように思います。あえて時代を反映させた作品を探すわけではないのですが、結果的にそうした現代社会の問題について考えるための材料を与えてくれる文章が選ばれることもあるわけです。

後藤　意図せず現実の課題と結びつくこともあるのですね。
　出典は比較的新しい本からお探しになっているように見えますが、いかがですか。

中村　個人的には、よく読まれているけれど、まだ中学入試には出題されていないような方や、これから注目されそうな方の文章を出題したいと考えています。そうやって選ぶと結果的に新しい作品が多くなるのかもしれません。

後藤　受験生にとって新鮮な作品を選んでいるわけですね。受験生だけでなく、御校の生徒にも読んでほしいと思うことはありませんか。

横倉　もちろんです。実際、入試で出た本のコーナーを図書館に設けていて、受験後に「あの問題の出典はこれだったんだ！」と言って借りて読んでくれる生徒もいます。そうした反応は嬉しいですね。

後藤　入試問題が生徒の読書活動につながるのは、意義深いことですね。

「注」は必要か否か

後藤　素材文についてもう一つ伺いたいのですが、小学生には難しい文章が多い一方で、文末に載せる「注」が他校に比べると少なめに見えます。その点はいかがですか。

中村　「注」を付けるか付けないか、付けるならどんな注釈にすべきかは、作問中に議論になります。小学生にとっては聞き慣れない単語でも前後の文脈から意味がわかる場合もあるでしょうし、辞書の語釈をそのまま載せて逆に混乱させてしまうこともあるでしょう。「注」の付けかたが本文理解に影響するでしょうから、慎重に議論して付けています。

後藤　今回は第２回の㈡で２つの「注」があるだけでしたから、片っ端から載せているということはないだろうとは思っていました。確かに、受験生が「スフィンクス」が何なのかを知らなかった場合には、この問八なんかは解けないですもんね。

2025年度　第2回 ㈡より

問八

　―線部７「芸術は不親切きわまりないスフィンクス」とあるが、どういうことを言っているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　芸術とは、あらかじめ目の前にわかりやすい解釈や答えを提示してくれるような存在ではないということ。

イ　芸術とは、受け取る側と提供する側の強い信頼関係なしに何かを与えてくれる存在ではないということ。

ウ　芸術とは、こちらがどんなに理解したいと思っても、難解さでそれを拒み立ちはだかる存在だということ。

エ　芸術とは、鑑賞する側がおもしろいと感じて先に進めるかどうかを常に試してくる存在だということ。

注）スフィンクス：ギリシャ神話に登場する怪物。山で旅人をとらえては謎を出した。

解答

（声の教育社解答）**ア**

「ダサい」間違い選択肢は並ばせない

後藤　次は設問についてお伺いします。選択肢の問題が中心で、後半に記述があるという構成ですが、選択肢はどれもしっかりした内容のものが並んでいますね。一目で誤りと判断できないというか。

中村　選択肢も丁寧に作成しています。すべての選択肢が問いにきちんと答えるような内容になっていることが前提で、その中から本文に照らして正しい内容の選択肢を選んでもらうようにしています。そもそも日本語としておかしいもの、この場面にいないはずの登場人物が突然出てくるものなど、先ほどの言葉で言えば「ダサい」間違い選択肢は作りたくないですね。

後藤　本文を読まずに選択肢同士を比べて正解を導くといった解法もありますが、それでは太刀打ちできそうもないですね。

中村　はい。単なる消去法で解けてしまう問題にしないようにしているつもりです。もしこれが記述問題だったらどう書くかを考えて、それに当てはまる選択肢を選んでほしいと思っています。

後藤　正解の選択肢はどれも長めですが、これは意図的なものでしょうか。

横倉　正解となる選択肢の精度を上げるために、結果的に長くなっているという面があるかと思います。引っ掛けるために長くしているわけではありませんよ。

メタ視点を持って解く

後藤　今回の出題でポイントになった設問はありますか。

中村　ポイントかどうかは何とも言えませんが、第１回㈠問九は、他とは少し異なる問題だったかもしれません。

後藤　「小説家の役割」を問う設問ですね。本文を無視するとすべての選択肢が正解になりそうです。

中村　「小説家の役割」について本文に直接書かれて

2025年度　第１回 ㈠より

問九

　―線部９「そういった社会で、小説家は～そもそも小説家の出番はあるのだろうか」とあるが、このときの「僕」はどのような思いをいだいていると考えられるか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　世の中の大勢を占める価値観に対し違和感を唱えるのが小説家の一つの役割だとしても、人々が善意に満たされそればかりを求める世の中において、その風潮に異を唱える作家が存在していけるのか不安に思っている。

イ　この世にまだ実現していない理想の世界を言葉を使って生み出すのが小説家の一つの役割だとするなら、人助けや感謝がすでに行きわたった社会において、それ以上なにを追い求めればよいのか分からなくなっている。

ウ　誰にも注目されることなく消えていってしまう小さな善意をすくい取るのが小説家の一つの役割だとするなら、すでに善意に満ちあふれた世界において、小説家は何を書くことができるのかうまく想像できずにいる。

エ　多様な価値観が存在することを読者に示すのが小説家の一つの役割だとしても、人々が人助けや感謝をよしとする風潮の中で、その風潮に反する価値観をどのように表現し発表すればよいのか分からなくなっている。

解答

（声の教育社解答）**ア**

はいません。本文全体をふまえて考えなくてはなりません。

横倉　正解の根拠は本文のここここに具体的に書いてある、という問題ばかりではなく、少しメタな大きな視点で全体をザックリつかむことで初めて正解が見えてくる、そういう問いも大切だと思っています。

全体をざっくりつかめば、この主人公が将来小説家になった場合に「イ」や「ウ」のような「理想」「善意」は目指さないだろうと。だから「ア」と「エ」で迷ってほしくて。この２つの選択肢は似ていますが、「ア」の「世の中の大勢を占める価値観に対する違和感」が適切で、「エ」のような「どのように表現し発表すればよいのか」といった方法論で迷っているわけではないのでふさわしくないと。

「小説家ってこういうもの」「理想の世界ってこういうもの」っていう、本文の外側にある自分の感覚、そのノイズを根拠に解いちゃう子がいるのですが、ここにはあえてそういう子が迷うような、いかにももっともらしい間違い選択肢が三つ並べてあるんです。だから「本文を無視すると」どれも正解に見えるというのは思惑どおりの反応だということになりますね。

記述力：文章全体を自分の言葉で再構成させる力

後藤　記述問題は最後の方に設定されていることが多いですが、本文全体の理解を問う問題ということでしょうか。

中村　はい、そうなることが多いです。東大の国語の評論読解題でも、本文の最後の方に傍線が引かれ、本文全体の主旨をふまえながら傍線部の内容を 120 字で説明させる問いが毎年出題されています。私たちも、本文全体の内容をふまえながら、問いにあわせて自分で再構成して書く力を求めているつもりです。傍線部の前後の内容や、ほかの問題の選択肢に使われていた言葉を機械的に繋ぎ合わせるだけで、正解になるような問題にはしていないつもりです。

後藤　やはり文章を全体としてとらえる力を見ているのですね。記述の採点は大変だと思いますが、想定外の解答が出ることもありますか。

横倉　解答例は最大限想定していますが、やはり意外な解答が出てくることもあります。だからといって採点基準を開始後に変えるようなことはありませんけど。

中村　当たり前のことですが、「どれだけ読めているのか、書けているのか」ということと、与えられる点数は比例していなくてはなりません。「読めている、書けている」答案に、より高い点数が付く採点をしなくてはいけません。ただキーワードがあるだけで加点するような単純な採点をするわけにはいかないのです。

新しい出題形式の可能性

後藤　最近の中学入試問題では、大学入学共通テストのように複数のテキストを用いたり、会話形式を導入したりといった問題が増えていますが、海城中学校では新タイプの出題形式導入の可能性はあるのでしょうか。

中村　これまでも会話形式の問題、複数テキストの問題を出題したことがありますが、形式ありきではなく問いありきでの出題でした。その形式でこそ問いたい内容が問えるという場合に出題するということです。

ある有名な劇作家の方が、ある会話形式の問題について「一人一人の発言が異常に長く、文章をただ会話に置きかえただけの全くリアルではない会話」と書いていましたが、見た目の新しさがあるだけで、わざわざ会話にする必要がない問題もあると思います。たとえば、従来の形式では問えないような思考力を問う問題になるなら良いのですが、そうでないならあえて新しい形式を導入する必要はないと思います。

受験生へのメッセージ

後藤　最後に、受験生に向けてメッセージをお願いします。

鈴木　この入試問題を、ただ入学するためだけに解くのではなく、読書の世界が広がる機会にしてくれたり、いろいろなことを考えるきっかけにしてくれると嬉しいです。

中村　私たちは言葉を通して世界を認識しているので、文章を読んで多様な価値観に触れ、多くの言葉を獲得していくことで、自分の世界はより彩り豊かなものになります。ですから、受験勉強の中で国語の文章を読む時間は、多くの言葉に触れながら自分の世界を広げている時間と言えます。中学に入学してから自分の世界をより広げていくための準備だと思って、楽しんで入試問題に取り組んでください。

横倉　最初に話したように、私たちはみなさんに読んでほしくて素材文を選んでいます。きっとみなさんに新しい世界の見方を授けてくれますから、問題を解いて終わりではなく、新たに備わった価値観を持って現実と行き来しながら読み返してみてください。それが心の成長につながります。豊かな世界を持っている生徒と授業で議論し、学び合いたいといつも思っています。みなさんの入学を楽しみにしています。

［取材後記］

今回の取材で特に印象に残ったのは、「綺麗ごとの枠を超えて、ダサくない問題を出したい」という言葉です。「言葉」を伝える国語教師としての信念が凝縮されています。入試問題という限られた紙面の中で、生徒たちに“世界の見え方が変わる体験”を届けたい――そんな先生方の情熱がひしひしと伝わってきました。

海城中学校の国語の問題を通して、子どもたちは初めて出会う価値観や言葉に触れます。その出会いをどれほど大切にされているかが、言葉の端々からにじみ出ていました。

私は過去問出版社として、長年、解説の作成に携わってきましたが、作問者の思いや苦労に触れ、改めてこちら側の責任の重さを痛感する取材となりました。

さて、2026 年度の受験生にとっては、今回が最後の記事となります。

入試問題がどれほどみなさんのことを思いながら作られているか、そしてみなさんの入学をどれだけ先生方が心待ちにしているか――少しでもその気持ちが伝われば、とても嬉しく思います。

では、最後はいつもの決め台詞でお別れしましょう！みなさんの志望校合格を心からお祈りしつつ…ごちそうさまでした！３度のメシより入試問題！

2025 年度　第１回　㈡より

問十

―線部 10「教室に溢れる多幸感と、その雰囲気についていけなかった自分のことも」とあるが、「僕」はどうして「その雰囲気」についていけなかったのか。「教室に溢れる多幸感」とはどのようなものであったかに触れながら、八〇字以上、一〇〇字以内で答えなさい。

（声の教育社解答）（例）

お互いにほめあったり感謝しあったりする教室の中で、生徒たちは常に幸せを感じていたが、その幸福感をつくり出していた心のこもっていない言葉やうわべだけの感謝に対して、「僕」は白々しさを感じていたから。